

障害の重い人の生涯学習（4）

—当事者・保護者のニーズにもとづいた支援—

企画者	三科聡子（宮城教育大学教育学部） 相澤純一・石川政孝（NPO 法人訪問大学おおきなき）
司会	三科聡子（宮城教育大学教育学部）
話題提供者	荻田知則・榎木暢子（訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学） 下川和洋（NPO 法人地域ケアさぽーと研究所・訪問カレッジ@希林館） 成田裕子（NPO 法人フュージョンコムかながわ・訪問カレッジ Enjoy かながわ） 倉本雅代子（東京都渋谷区重症心身障害児（者）を守る会・訪問大学おおきなき） 井口啓太郎（文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課 障害者学習支援推進室）
指定討論者	飯野順子（NPO 法人地域ケアさぽーと研究所）

KEY WORDS: 重度障害者 卒業後の生涯学習 当事者の声

（企画趣旨）

重度障害者の生涯学習に取り組む団体は徐々に増えてきた。当シンポジウムでは、卒業後に在宅や施設で生活をする障害の重い人本人や保護者の生涯学習への期待や願いを受け止め、12 年間の学校生活で学び培った力を切れ目なく伸ばし発揮できる機会と場を創り出そうと努めている実践に焦点をあてる。それぞれの話題提供の中で紹介される事例については、本人・保護者のご了解をいただいている。

（話題提供 1 訪問カレッジ@愛媛大学の実践）

2020 年度は、コロナ禍でも継続可能な学習プログラム「訪問カレッジオンライン」として、読み聞かせ、音楽、工作、お出かけの 4 テーマに分けた学習コンテンツの作成・配信を行った。また、オンデマンド型学習+オンライン会議システムを用いた面談を行う「スタッフ養成講座（入門編）」を実施し、愛媛県と香川県の受講者 7 名が修了した。2021 年度は、障害当事者や障害者と接する経験がない・少ない方等にもオンライン講師を依頼し、生涯学習の幅を広げるとともに、オンライン講師やその周囲への生涯学習に関する理解啓発を進めていく予定である。

（話題提供 2 訪問カレッジ@希林館の実践）

2012 年に学生 6 名からスタートした本事業は、今年 10 年目を迎え、21 名が在籍している。40 歳台に筋緊張亢進による呼吸障害で喉頭気管分離術を行い、声を失い、絶望してご両親に「死にたい」と訴えた A さんは、学びを通じて「命の続く限り学び続けたい」と意思伝達装置で感想を述べた。

施設入所中の B さんは、学齢期に院内分教室や施設の作業療法でパソコン操作を学び、現在の訪問カレッジでもコロナ禍で外部との面会禁止の中、オンラインでの学びを継続し、「卒業後も充実した楽しい生活を送っています」と述べた。

生涯にわたって学び続ける機会の保障が大切である。

（話題提供 3 訪問カレッジ Enjoy かながわの実践）

2019 年特別支援訪問教育卒業生と家族の「卒後の学びの場探し」に応え事業を開始した。3 年目の現在、県内各地から 10 名の学生が入学し、それぞれのその人らしい学びが進行中である。当然のこと、場所や時間・回数、学ぶ内容・方法は各自異なるが、カレッジ生を中心に学習支援員や家族が集まり、一緒に学びを創りだしている。学びは、創りだす過程に関わる全ての人の学びになり、生活に潤いをもたらしているように感じる。今年から教員を目指す大学生との関わりも始まっ

ている。学びの創造を通して関わる人やツールも広がり、事業としてゆっくりだが着実に成長している様子を報告する。

（話題提供 4 保護者の声 東京都渋谷区重症心身障害児（者）を守る会・訪問大学おおきなき）

息子は学校卒業後もゆっくりと成長している。が、青年期の息子が学びの支援を得る仕組みはない。息子のコミュニケーションの学びに ICT を活用したいという私の願いに訪問大学が力を貸してくださることになった。最新のテクノロジーを活用するための模索を続けた 5 年間で、息子はできることを増やして活発になった。私や家族は息子を注意深く観るようになり、息子からコミュニケーションが始まる生活が重要だと気づいた。学びを通して家族の絆は深まった。今後は、地域の人々の力を借りて進める生涯学習活動にも取り組みたい。

（話題提供 5 国による障害者の生涯学習を推進する取組）

障害者権利条約の批准等を踏まえ、文部科学省では平成 29 年度より障害者の生涯学習政策に着手している。平成 30 年度より約 1 億円の予算で「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」を開始。令和 3 年度は(1)都道府県を中心とした地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築、(2)市区町村単位での地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進の各メニューで、計 22 団体に委託して事業を推進している。このうち、障害の重い人を対象とした実践研究も、3 団体がモデル的実践に取り組んでいるが、今後はこれらの研究成果を生かした他地域での展開やコロナ禍の課題を踏まえた ICT 活用普及等も検討課題としたい。

（指定討論）

このシンポジウムを通して、明らかにしたいことは、①生きること学ぶこと。学ぶことは生きる喜び。その人らしい人生を送るために、その人の居場所としての学ぶ機会と場の創出は、社会的な責任である。②その創出のためには、ライフステージに応じた生涯学習の視点で、どんな活動が必要なのか、実績づくりとその検証が必要である。③このような取組を始めて 10 年経過しているところもあり、実績の積み重ねの中から、家族支援や地域支援など、幅広くそして深みのある価値づけができてきている。④必要なのは、このような取組を拡充できるような仕組みを創設することである。

(MISHINA Satoko, AIZAWA Junichi, ISHIKAWA Masataka, KARITA Tomonori, KASHIKI Nagako, SHIMOKAWA Kazuhiro, NARITA Yuko, KURAMOTO Kayoko, IGUCHI Keitaro, IINO Junko)